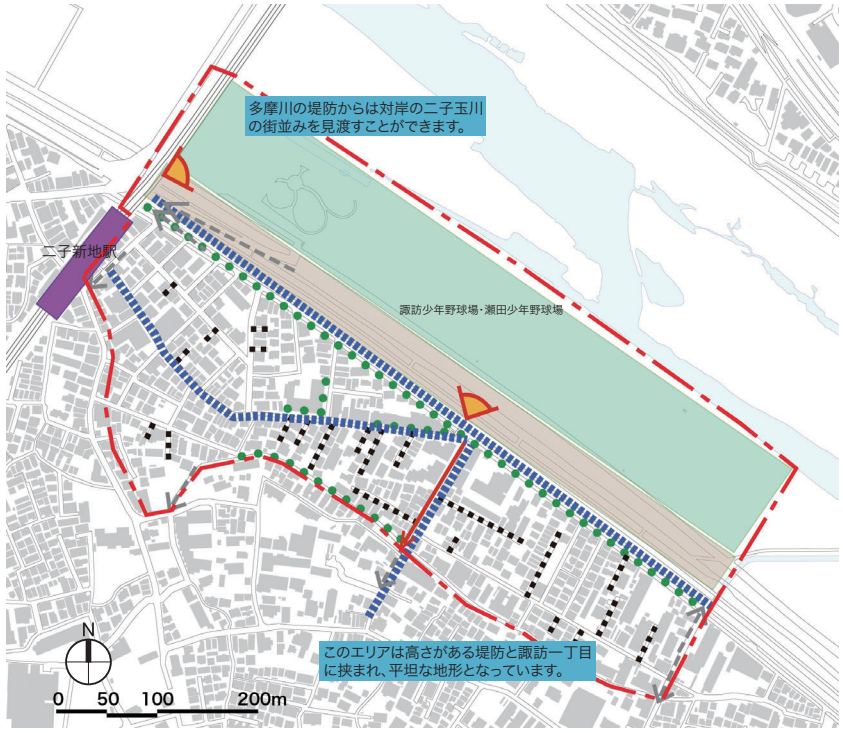
3-1　瀬田エリア

諏訪少年野球場・瀬田少年野球場が整備されている多摩川河川敷を有するこのエリアは、江戸時代以降に起きた河川の数十回もの氾濫の結果、現在の平坦な地形が形成されました。1966 年現在の二子新地駅が整備され、同時期に道路基盤整備が行われ、住宅開発が進みました。また、このエリアは多摩川の堤防と小高くなっている諏訪一丁目に囲まれ、他エリアよりも標高が若干低くなっており、令和元年東日本台風（台風 19 号）による浸水被害を大きく受けた地域でもあります。

景観特性



1.曲線的な道と直線的な道が生み出す視線が抜けない街路空間

多摩川の流れによって生成された曲線的な街路と、宅地開発によって人工的に整備された直線的な街路が混在し、住宅地が形成されています。街路は全体的に幅員が狭く、曲線的な街路の場合は先を見通すことができません。また、住宅建設のために多く整備された接道は、視線が遠くに抜けないため閉鎖感が生まれています。

2.緑豊かな河川敷に相反する住宅密集地

このエリアは多摩川沿線道路沿いの街路樹が連続しており河川敷の緑との親和性が生まれています。緑豊かな河川敷に対し、住宅地には戸建て住宅や集合住宅が密集し、緑を感じにくいです。また、空間の開放性に欠けています。

3.堤防が生み出す河川敷と住宅街の分断

多摩川の堤防の天端は多摩川沿線道路と歩道が整備されており、開放的な道路となっています。天端からは、野球場や対岸の二子玉川まで、自然豊かな景観を見渡すことが可能でこのエリアの数少ない眺望点となっています。一方で、この堤防は壁として住宅地と河川敷を分断し、住宅地に閉塞感をもたらしています。

景観形成の目標

密集した住宅街を多摩川と繋がりを持たせた空間形成を目指す。

本エリアは、多摩川、多摩川沿線道路、住宅地というように、北西に向かって平行に連なるエリア形成が特徴的である。住宅地から多摩川河川敷へのアクセスのし易さ、住宅地への更なる'緑の景観'を増やすことを目的とする。

景観形成の方針

1.狭さの中で余裕を持たせた街路空間を目指す

景観形成の考え方

住宅の密集によって生まれた、閉塞感のある街路空間の緩和を目指す。

具体的な方策

- ■ 曲線街路において、住宅の塀に重たい印象の材（ブロック塀など）を使しない。
- ■ 直線的街路において、行き止まりの建物の外壁を明るいトーンにする、階高を低くすることで閉塞感の緩和をする。
- ■ 電柱の地中化によって、視界の上空に開放性をもたせる。

電柱を地中化し、開放感をもたらす

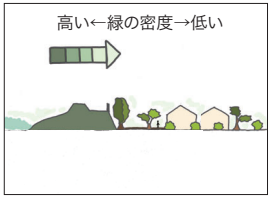
2.多摩川へと繋がる緑のグラデーションを形成する

景観形成の考え方

多摩川の緑の豊かさ、解放感と相反して密集し、視界が抜けにくい街なかへ緑を滲ませていく。

具体的な方策

- ■ 集合住宅において、アイレベルでの植栽を積極的に行い、住宅街に連続性のあるまとまった緑を生み出す。
- ■ 多摩川沿線道路側の街路樹を更に豊かにすることで、周辺住宅への騒音・景観の向上を目指す。



緑豊かな河川敷から住宅街にかけて緑を点在させて河川敷からの連続性を生み出す

3.多摩川へのアクセスを良くし、堤防が生む閉塞感を軽減する

景観形成の考え方

河川敷と住宅地に緩やかな繋がりを持たせる。

具体的な方策

- ■ 堤防を抜き、河川敷へと繋がる歩行者専用トンネルをつくる。（洪水時は扉を閉められる。）
- ■ 多摩川への抜け道を視覚的に増やすために歩道橋を整備する。

多摩川沿線道路、堤防下を貫く歩行者用トンネルによって、河川敷へのアクセス向上を図る